

年末年始の伝統行事



こたち 木太刀の舞で豊作祈願

御厨町寺ノ尾上地区にある八幡神社（森川典幸宮司）で12月15日、木太刀の舞が奉納されました。

イタビの木で作られた太刀を担いで舞う神楽で、江戸時代からの伝統行事。太刀が大きいほど翌年は豊作になるとの言い伝えがあります。

氏子の田中祐毅さん（36）が朝から約3時間かけて作った太刀は、長さ1.2^{メートル}、重さ10^{キログラム}。今福神社の早田伸次^{しんじ}禰宜が太刀を担ぎ、笛と太鼓に合わせて舞を奉納し、集まった地区住民約20人が来年の豊作を祈りました。

もぐら打ちで無病息災を祈願

1月初旬、無病息災などを祈願する「もぐら打ち」が市内各地で行われ、新わらで作った「もぐら打ち棒」で玄関の床などをたたいて、無病息災や家内安全を祈願しました。

①星鹿地区で1月6日、小中学生10人が集まり、地区内の約110戸を2班に分かれて回りました。子どもたちは、玄関先で「祝いましょう 祝いましょう…」と大きな声で掛け声をかけながら、新わらで作った「もぐら打ち棒」で玄関の床をたたきました。

②今福保育所（椛島洋子所長）では1月15日、園児56人と今福町長寿連合会（田中一郎会長）の会員約20人が行いました（今福公民館主催）。同会員が新わらと竹で作った「もぐら打ち棒」で、園児と会員と一緒に声を合わせて地面をたたきました。





経箱をくぐって無病息災

大般若の経典が入った箱の下をくぐって一年間の無病息災を祈願する「大般若^{だいほんにゃ}」が1月8日から14日にかけて、志佐町の8地区と福島町の5地区で行われました。

江戸時代、この地方に疫病が流行したとき、大般若経を祈りながら回ると疫病がおさまったことが始まりとされています。

志佐町里地区では11日に、還暦と厄入りを迎える4人が、重さ約10kgの経典の入った経箱を交代で担いで、地区内の約200戸を「だいはんにゃー」と掛け声をかけながら、回りました。各家庭では、担ぎ手にお神酒などを準備して出迎え、経箱の下をくぐり、一年の健康を願っていました。

大杯で酒を回し飲み

12月24日、志佐町池成地区に300年以上前から伝わる「佐々木様」が行われました。

池成地区には、平戸藩士でこの地域を治めていた「佐々木様」が、参勤交代で留守にしている間に妻の不義のうわさを耳にし、大酒を飲むようになったという故事が残っています。今では「佐々木祭」として、先祖が佐々木様の同士だった同地区の5世帯が、命日といわれるこの日に持ち回りで毎年開いています。

地区にある佐々木様の墓参りをした後、今年の当番にあたる石井實男^{じつお}さん宅に5世帯から10人が集まり、直径40cmの大杯で酒を回し飲みし、霊を慰め親ぼくを深めました。



ももてこう 百手講で豊凶を占う

志佐町庄野地区の王嶋神社で1月8日、百手講が行われました。

的に当たった矢の数で今年の豊凶を占うもので、市の無形文化財に指定されています。

今年の射手は、久保川俊治^{しゅんじ}さん(47)と北川浩幸^{ひろゆき}さん(46)。烏帽子と狩衣姿の2人が約10m離れた場所から直径50cmの的にめがけて約50本の矢を放ちました。地区の住民が見守る中、3本が命中し、うち1本が的に真ん中に刺さりました。中川明宏^{あきひろ}宮司は「1本は真ん中に当たっているのだから気を引き締めていけば豊作になるでしょう」と話していました。

